

第 89 話 初の地方開催年会：大阪大会(明治 36 年)

薬学雑誌 1903 年度 p 413-430

先月触れた大阪大会についてももう少し書く。正式に決まったのは明治 35 年 9 月神田福田屋での評議会。年が明けて 1 月、在京の岸田吟香(劉生の父)ら 4 名、大阪では道修町薬業界の武田長兵衛、田辺五兵衛、塩野義三郎、小野市兵衛など 27 名が準備委員に選ばれた。

2 月からは委員長辻岡精輔のもと「すでに学会において期日を広告なりし上は、当市において万一総会に不利なること出来る場合あるといえども、毫も変更せずして挙行すること」と準備に総力を挙げた。明治の飛行機研究者として知られる二宮忠八は、このとき大日本製薬の社員であったが準備委員会ナンバー 2 の常務委員として大活躍した。

大会は学術講演会から始まった。4 月 3~4 日の両日で 12 題。二宮も小学校卒でありながら田原、丹波の博士らに混じって大会講演に選ばれクレオゲストについて発表した。

5 日夕方 5 時、中之島大阪ホテルでの大懇親会の様子が薬誌にある。「表門に一大緑門、大国旗二旒を交叉し、階上より垂下して第 23 回薬学会総会宴会場と大書したる票札を掲ぐ。大広間は食卓に無数の挿花を散在し、正面の花瓶には高さ三丈に余る一大桜花を挟み、満室あたかも春野に逍遙するがごとし。(略)用意の号砲しきりに開会を報ずるや車軸相並びて雲霞のごとく表門に蝟集し陸続として来る。(略)」

午後 6 時、陸軍軍楽隊の吹奏起り、それまで別室で茶菓を供せられていた一同は宴席についた。「光栄ある来賓と、服装態度実に社会の表に起つ親愛なる会員の綺羅たるこの一大光景は何たる盛挙ぞや。」いったい何事かと宿泊中の西洋人も見物に来た。同ホテル開業以来の盛大な会で、和酒、麦酒、赤酒から料理までホテルの最も精選、吟味したものが供された。

宴会中、淀川中流につないだ煙船はしきりに妙火を大空に放った。しかし河中に仕掛けた長さ 30 間余の「日本薬学会万歳」と大書したる仕掛け花火は、降雨のために会員が見物席に移動してくるまで待てず、外の市民のみが楽しんだ。

初めて地方で開かれた総会参加者の内訳は、大阪 113、東京 38、兵庫 25、京都 15、石川 11 をはじめ、合計 3 府 27 県で 273 人であった。それまでの総会参加者は 100 人程度であったから成功と言えよう。

長井会頭はテレーゼ夫人、子息、日野九郎兵衛、溝口恒輔氏とともに 8 日難波駅を出発、和歌の浦の風景を賞し、続いて高野山に上った。空海大師の偉業を探り 11 日に帰阪したという。

小林 力